

5月

Mey. | 2024
沖縄開教本部通信
vol.111



「ジュリの真宗信仰」①

琉球大学大学院修士課程

みなもと さやか
源清香

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

近世の琉球において、浄土真宗は禁制であったこと、にもかかわらず那覇を中心に密かにそれを信仰していた人々がいたことはご存知でしょうか。西本願寺と直接に書状のやりとりを行うなど篤信家であった那覇士族、仲尾次政隆の名は耳にしたことがあるかもしれませんが、政隆のような士族身分の者は少数派であり、門徒の大多数を占めていたのは女性、とくに辻村（以降、辻）のジュリ（遊女）たちでした。本連載では、禁制下、彼女たちがどのような真宗を信仰していたのかについて、史料をもとにみていきます。

第一回目である今回は、本題に入る前にまず、辻とジュリについて簡単に説明しておきたいと思えます。

そもそも、近世の琉球には遊郭が那覇の三ヶ所にありました。辻はそのうちのひとつで、ほかに仲島と渡地がありました。辻の社会の大きな特徴は「女性のみ」で成り立つ社会であったということですが、これは一般的な琉球の地域社会が「地縁・血縁」によって形作

られたこととは対照的です。辻を構成するのは、幼い頃に各地の貧しい家々から前借金と引きかえに売られてくるなどした抱え妓らと、その抱え親であるアンマー、元老株である婆々（パーパー）たちジュリでした。抱え妓らとアンマーは非常に強い結びつきである疑似的な親子関係を持ち、抱え妓もまた前借金返済後は辻に根を下ろしてアンマーとなりました。そして辻の内部には、自治を担うアンマーと婆々による協議制が存在していました。また、抱え妓は客をもてなすための料理や、三味線や踊り、琉歌等の芸事なども身につける必要があり、ジュリは芸妓的側面も有していたことが分かります。

なお、琉球には基本的に旅宿がありませんでした。そのため、那覇を訪れた者の滞在先としての役割も辻にはあり、その滞在者の中には琉薩間を往来する薩摩の船乗りもいました。また、ジュリに身のまわりの世話や琉球での商売を依頼する者もあり、この場合ジュリはその船乗りの別宿に「洗濯女」として同居しました。

以上のようなジュリや辻の社会の特徴と、辻における真宗信仰の拡大は決して無関係なことではありません。当時、薩摩では真宗が厳しく禁じられていましたが、薩

摩の船乗りの中にはかくれ念仏者も存在していました。彼らは馴染みのジュリに真宗を布教したり、本尊下付や懇志の上納など西本願寺と琉球門徒のやり取りの仲介等を担ったりもしていました。また、仲尾次政隆等在家の指導者や東本願寺派遣の僧侶らは、辻に布教・信仰の拠点となる寄合や講をつくって活動を行っていました。しかし、真宗は禁制であるため、王府による取締りである法難事件が三度発生し、流刑や罰金刑に処せられる者たちもいました。

では、そのような中、信仰の拠点となっていた辻において、ジュリたちはどのような真宗を信仰していたのでしょうか。これについて、具体的に次回よりみていきたいと思います。



「戦前の辻(前道)」

(那覇市歴史博物館提供)

発見！ 琉球国王の肖像画

戦時中に沖縄から流出していた「御後絵（おごえ）」がアメリカで発見され、話題を呼んでいる。うちなーぐちで「うぐい」と呼ばれるこの琉球国王の肖像画は、実物で確認されたのは戦後初めてで、三月十四日に沖縄県に返還された。

今回返還されたのは、第十三代尚敬王と第十八

沖縄は今！

沖縄三十年ぶりの水不足

沖縄県は2023年9月からまとまった降雨が少ないことが影響して、ダムの貯水率が例年に比べて大きく低下しており、3月中旬でダムの貯水率43.9%であり、県内にあるダムの合計貯水率平年値75.7%との差はマイナス31.8

代尚育王の御後絵ほか十二点。

沖縄県は流出した文化財について、2001年にアメリカ連邦捜査局（FBI）の盗難美術



ファイルに十三点の登録申請をしており、今回返還された先述の御後絵二点もこれに含まれている。

今後、詳細を調査して公開されるそうだ。

表面の記事の寄稿者
源 清香 (みなもと さやか)
奈良女子大学文学部卒業・琉球大学大学院地域共創研究科修士課程在学中

ポイントとなっている。県では沖縄県渇水対策本部会議を開催し、節水対策を決定した。

今回の節水対策として、国・県の機関において節水の周知を図るとともに、若い世代の取り組みを促しながら市町村・学校・企業・ホテル等に広く節水協力の呼びかけを行っている。

以前にも沖縄本島では、1981年7月から

1982年8月まで、326日も給水制限が続き、航空機による「人工降雨作戦」も行われた。

また1991年・1996年には、夜間の8時間、断水をしないといかない状況もあった。

現在も沖縄県内の建物の多くが、屋上にタンクを設置しており、水不足対策をしている。



ぬーがじ
何我寺

在住

さかもと たけし
坂本 長司

滋賀県から沖縄（読谷）に来て9ヶ月になる。海がなんとも美しい。さとうきび畑がのどかに広がる。珍しい花々や蝶が目を引き。南国果実がおいしい。冬も暖かく、時間がゆったりと流れている。まるで寿（いのち）の楽園だ。

しかしそこに、いまだに戦争の傷痕が隠れ残り、米軍基地が幅を利かせている。このことに慣れすぎて「当たり前」と感じる風潮がここ沖縄でも広まりつつあるように感じる。とくに世代間における感覚のちがいがあのように思う。ましてや本土で生活をしている一般の人たちに、切迫した危機感があるとは思えない。

最近沖縄では、『沖縄狂想曲』（太田隆文監督）というドキュメンタリー映画が封切られ、たまたま観る機会を得た。現代沖縄の問題、すなわち日本の問題が赤裸々に証言されていた。是非、本土でも上映されるべきだと感じた。

それぞれに思いが異なる。異なるというのがじつにやっかいだ。そこに利権意識がからんでくるとさらにややこしい。国と国が対立するばかりでなく、国内部の組織と組織、あるいはそれぞれ組織内部での派閥と派閥、しいては同じ屋根の下で暮らす家族どうしであってすら、ときに対立しなければならぬという現実がある。

だからこそ、仏教を聞かなければならないと思う。対立しあう者どうしがともに仏教を聞くことで、世界が少しでも居心地の良い場所になっていくことを願う。